

## 学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第14回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：5月25日(日) 1日目

大学名：北京科技大学

氏名：馮燚

飛行機から降りるとき、私たちは興奮のあまり「ついに日本へ来たぞ！」と叫んだ。5月25日、30分授業に出ただけで、すぐに休暇を取り、あたふたと空港に駆けつけた。空港のマクドナルドで食事をとったが、そこで初めて他の団員たちと今回の旅行の目的を話し合うことができた。まだぎこちなかったが、みんなと今後数日間で次第に打ち解け、友達になれそうな気がした。

今日、初めて会ったガイドの中島さんはとてもいい感じの人で、他のガイドと違い、日本を紹介するだけでなく、国や学校の名誉のために自分を厳しく律するよう教えてくれた。また関誠さんはとてもユーモラスな人で、最初は私たちと同じテーブルで食事をし、とても楽しく話してくれたが、最後にはやはり先生のいるテーブルに移り、先生たちと日本語で楽しく話し始めたので、日本語をしっかりと学んでこなかったことを後悔した。

初日は少し疲れたが、まあこんなものだろう。明日はしっかりと日本と恋に落ちたいものだ！

日付：5月25日(日) 1日目

大学名：北京交通大学

氏名：趙汝豪

午後14時20分、私たちはANAのNH160便に乗り、今回の12日間の日本旅行をスタートさせた。中国の航空会社と異なるのは客室乗務員全員の年齢がやや高かったことだ。その個人的要素を除けば、とてもくつろげた空の旅だったと言える。客室乗務員は中国語と英語ができて意思疎通に何の不自由もなく、ヘッドホンや毛布は事前に準備され、態度も極めて恭しく、飲み物の種類も豊富(お酒も出されていたのは意外だった)。隣に座った二人の日本人のおじさんの内、一人は見たところまるで初めて飛行機に乗ったかのように緊張し、写真を撮ったり、ぶるぶると震えたりしていた。もう一人は私と同じアニメファンで、搭乗後すぐに『ガンダムUC(ユニコーン)』を見始めた。私はこのアニメが大好きだが、声も字幕もなかったのでも面白くなく、仕方なく機内のその他メディアや本に関心を向けた。機内のテレビはちょうど中国のSU37式戦闘機が日中の係争地域にあらわれたことを伝えていたが、日本の大衆がそれを見てどのように反応するかとても気になった。だが機内には私のように退屈そうにテレビを見ている者はほとんどおらず、見ていた者も大した反応はなく、私が思っていたほど大きな問題になっていなかったことがわかり、気分が少し楽になった。

飛行機はゆっくりと降下し目的地の関西国際空港に到着した。青空と白い雲、快適な気候に期待も高まってきた。そしてたった今一息ついたところである。OSAKA, I am coming!

日付：5月25日(日) 1日目

大学名：中国石油大学

氏名：黄兆鑫

北京での見送りがあまりにも盛り上がったせいで、我々一行の12日間の訪日ツアーはその余韻の中をスタートしたが、言葉にできない嬉しさがこみ上げ、空港行きの電車の車内で静かにしていた日本の乗客と比べればそれは明らか

かであった。

機内で隣の席に座ったのは日本人だったが、日本語のできない私は、彼と話をするきっかけがなかなかつかめなかった。話のきっかけを作ってくれたのは一杯のコーヒーだった。彼はうっかりしてコーヒーを私のズボンにこぼしてしまったのだ。彼は慌てて拭いてくれたが私は大丈夫ですよと答えた。最初のコミュニケーションに成功してからは、自然な交流が始まった。この方は京都大学の名誉教授で、北京で環境方面の交流をしてきたとのことである。私は自分の知識を基に、中国における環境対策の重要性についてこの先生と話し合った。先生によれば、中日両国は友好的な隣人であり、環境にやさしい社会を作るという思いは一致しており、双方とも環境保護産業において大きな発展の余地を有しているという。

先生との対話は飛行機の着陸によって打ち切られたので、記念撮影をして別れた。会うは別れの始めというが、もう少し早く知り合っていたら良かったと思った。しかしまさに一瞬の喜びだからこそ無限の味わいを残すともいえるかもしれない。一瞬のものでも、人生の素晴らしさを心に刻み、前進する原動力と成り得るのである。これからの日々にも出会うであろう忘れがたい一瞬を記録し、詳細に整理して、人生の美しい楽曲をアレンジしたいと思う。

**日 付： 5月25日 (日) 1日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 孫萌**

今日は日本へ出発する日だ。皆が訪日団の制服に身を包み早々と空港に集まってきた。機内に入って、私の隣に座ったのは二人の日本人だった。日本語で彼らと話した時、私はやっと自分が本当に日本へ行くのだと実感した。客室乗務員が日本語でアナウンスをしているのを聞いた時には、日本語ができることはとても幸せなことだとしみじみと感じた。

飛行機から降りるや、私は大阪の湿り気を帯びた空気に酔いしれた。礼儀正しいスタッフやユーモラスで楽しい運転手のおじさんたちは私の心配を払拭してくれた。日本の皆さんの好意は本当に私たちを我が家に帰ったように感じさせてくれた。

日本では至るところで人文的要素が現れていた。高速道路上には一定間隔で緊急用電話があり、どこでもコンビニや自販機が目についた。二人一部屋のルームカードでさえ名前でも区別されていた。私は今回の訪日活動に参加することができてとても幸運だと感じた。明日の活動に期待！

**日 付： 5月26日 (月) 2日目**

**大学名： 北京科技大学**

**氏 名： 武文合**

今日は訪日2日目で、正式な見学の初日である。朝食をとった後、悠久の歴史を持つ日本一の古都・京都を車内から眺めていたが、沿道の家屋は皆それぞれ趣があり、家屋もきれいで輝いており、全体としての美を感じた。中島さんは京都は日本人の「心のふるさと」であり、日本文化を象徴する場所として、沿道にはたくさんの寺や神社そして古建築があり、無数の戦乱を経て、日本の最も貴重な精神的財産が伝えられてきたと紹介してくれた。今日は偶然にも雨で、私たちは嵐山を訪れ、周総理が若くして日本へ留学した際、雨の中嵐山を訪れた時の思いを体験した。「人間(じんかん)万象の真理、求めるほどに曖昧模糊(あいまいもこ)となるも、そこに偶々(たまたま)見いだした一点の光明、真(まさ)に愈々(いよいよ)艶(あで)やか也！」周総理は若くして、国を滅亡の危機から救い出す真理を求め日本へ留学し、進んだ科学技術を学び、中華の復興のために学んだ。このような遠大な志を我々現代の若者は学ばねばならない！

午後は高台寺で茶道と禅文化を学んだが、浄因大師の紹介によれば、日本の茶道と禅文化は全て宋の時代に中

国から伝来し、すでに1000年以上伝承されているが、依然としてその独特の魅力を放っているという。しかしこのような伝統的な茶道は現在の中国ではすでに消滅しており、とても残念である。一つの民族にとっては、まさにこのような伝承されてきた文化のソフトパワーといったものこそが、世界の諸民族の中で立ち上がる支えになるのである。私たち学生は、このような文化を学び伝承し、古人が恵まれない条件の下で自然と闘って得た素晴らしい知恵を取り入れなければならない。座禅のとき、私たちは呼吸を静め一切の雑念を排除し、自分の心の中を感じるように言われた。短時間の体験だったので、実際にそうした境地に到達することはできなかったが、忙しい現代人は時には自分の歩みを緩め、自分が心から欲しているものは何かを問い、本当の自分を確立すべきだと感じた。

日 付： 5月26日 (月) 2日目

大学名： 中国石油大学

氏 名： 王浩

空から小雨が降り、我々は階段を上って、小道に沿って嵐山にある目標に向かって進んだ。そこには周恩来総理の思いが遺されているのだ。「人間(じんかん)の万象の真理、求めるほどに曖昧模糊(あいまいもこ)となるも、そこに偶々(たまたま)見いだした一点の光明、真(まさ)に愈々(いよいよ)艶(あで)やか也！」お天道様も粋なことをするもので、私たちに雨の中、周総理の当時の境地を再体験させてくれたのだ。私たち大学生も重要な責任を負っている。私たちはもうすぐ社会の各職場で、社会構築の重責を負うことになるため、若いうちに真理を求める必要がある。

午後の座禅と茶道は新境地を開いてくれた。茶道の先生は私たちに礼儀から始まり作法の細かなことまで話してくれたが、その中から、中国から伝えられた茶道或いはこの芸術自体に極めて多くの人生の哲理が含まれていることが分かった。一つひとつの所作からも茶人の品質への追及、他者に対する尊重を見出すことができるが、これらは古代の礼儀を忠実に反映したものであり、中国から伝来して以来、完全に保存されてきたのである。その間何度も、中国から伝えられたという点に言及していたが、中国人はすでに無くしてしまったということで、私は気まずい思いをした。中国人の文化が、他人の手で伝承されているのである。しかしこれと同時に、私は日本人の執着心と粘り強さに敬服した。文化の継承にはある種の信仰が必要であり、忙しい現代人は、このような細々したことを堅持することに億劫になっている。そうした意味で、日本は我々に良いお手本を見せてくれた。

日 付： 5月26日 (月) 2日目

大学名： 北京第二外国語大学

氏 名： 鄭子茂

初めての訪日でいささか興奮してしまい、心の切り替えができていなかった。そのためこの日の行動で多くのミスを犯し、訪日団全体に対して悪影響を与える結果となり本当に申し訳なく思っている。グループ長として自分のグループをしっかり管理することができず、毎回遅れたり、或いは集合地点に最後に到着したりして、訪日団全体の進行を遅らせてしまったのだ。当初私は自分の仕事はうまくいっていると思っていたので、問題が出るのは他の団員が決まりを守らず、私の話を聞かないせいだと思っていた。しかし引率の先生と話した後、自分の考え方が誤っていたことに気が付いた。団体のリーダーたる者は、もし団体のムードづくりや団結をうまくできなければ失敗である。しかもリーダーは、自分の持つオーラで団体全体をコントロールしなければならず、単純に放任したり批判したりすることはまったく無意味なのである。

その後は管理能力に一定の向上があったほか、日本文化への理解がより深まった。私たちが見学した京都は日本の古都であり、昔の日本の建築物や精神を多く残している。その最も代表的なものは金閣寺である。金閣寺はどの角度から見ても格別な絵巻であり、正にいわれる「横から看れば嶺と成り、側(かたわら)よりは 峰と成る、遠近高低、各(おのおの)同じからず」であり、自然と一体に溶け込んでこそ、こうした見事な美しさを見せるのである。特に雨上がり

の金閣寺は「水光激(れん)瀟(えん)として晴れてまさに好し、山色空(くう)蒙(もう)として雨もまた奇なり」というぼんやりと捉えどころのない感覚を与える。美を追求するが、「美」には縛られておらず、逆に自然の美を巧みに利用して建築美を浮き立たせている。その素晴らしさは、もし自分の目で見ることができなければ、信じることができないほどである。

午後は高台寺で日本の茶道と仏教文化を体験した。茶道における「苦みの中の甘さ」にしろ、座禅における「心に雑念がない」境地にしろ、毎日学業に明け暮れている私にとっては肩の荷が下りたような気がした。正に大師の説くように、「我々の心は一枚の鏡のように、良い物事に会えば必ず良い物事を映し出し、逆もまた然り」である。私たちは常に美しい事物を好むため、美しくない事物を避けるが、私たちは重要なことを疎かにしている。事物が美しいか美しくないかは私たちが決めることではなく、ただそれらと向き合うしかないのである。そうしてこそ人生における破格の出世や多事多難な運命に対しても自分自身で悟ることができるのである。ここで思いだした詩に「春に百花あり秋に月あり、夏に涼風あり冬に雪あり、もし閑事の心頭にかかる無くんば、すなわち是れ人間の好時節」があるが、人生における様々な事物とありのままに向き合うことで、心は明鏡の如くきれいで明るくなり、それ以外は何も要らないという境地に達するのである。

**日 付： 5月27日 (火) 3日目**

**大学名： 中国石油大学**

**氏 名： 劉珈源**

ついに期待していた大阪大学の見学の日がやってきた。

朝食後、私たちは大阪大学へ行く前に、まずオムロンを訪れた。ここでは他者への尊重と自己価値について学ぶことができた。このオムロンは全スタッフ178名中、123名が障がい者で、これら障がい者がこの会社の主体になっていた。しかし見学時に見られたのは障がい者の不便さや消極性ではなく、逆に整然と効率的に働いている姿だった。全ての人々が自分の価値を実現するために努力していた。障がい者の仕事上の便宜を図るために、会社は多くの発明や工夫を行い、作業環境をより障がい者に適したものに変え、作業効率を保証し、同時に就業の機会も増やしている。ここでは多くのことを学んだ。私は今後、ここで見た尊重と向上心を必ず皆に伝え、またこれらから学び吸収したいと思う。

昼はやっと中華料理にありつくことができた。

午後、大阪大学へやってきたが、最初の感想はとにかく大きいということで、環境も特に良かった。ここで私たちと交流した学生はとても和やかで親しみやすかったが、重要なことは皆とても礼儀正しく、謙虚だったことである。その後、私たちはレーザーエネルギー学研究センターを見学した。特に驚かされたのはこの設備で、バスケットコート2面分もある巨大な加速器プラントをこの目で見て、大いに視野を広げることができた。今後もこのような世界のトップクラスの学校で学びたいと思った。見学後、私たちは中国と日本の大学生生活の違いについて交流を行った。違いはあったが大同小異で、唯一大きな違いは、中国ではひたすら学習であるということ、一方日本では様々な活動がメインだったことである。夕方の懇親会は素晴らしかった。

夜、新幹線を体験してホテルへ戻ったが、その後はそのまま寝てしまった。

**日 付： 5月27日 (火) 3日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 柏旭**

今日私たちは朝食後、まずオムロン京都太陽株式会社を見学した。ここは専ら障がい者に仕事を提供する会社で、会社の大多数の人は様々な程度の障がいを持っている。会社の製品は主に電源、コンセント、携帯式血圧計、音声付体温計などである。障がい者が製品の組み立て作業を行えるように、この機械は特別な設計がされている。例

えば聴力障がい者には視覚指示灯を設計して作業を指導しているが、これは「人と機械の組合せ」であり、更に「人と人の組合せ」もある。会社の理念の中に、会社は社会のために貢献しなければならないという一文があった。私はこのように社会や社会的弱者の生活に関心を寄せる人々がいることにとても敬服している。しかしこの会社自体はきっとオムロングループのサポートがあり存続していると感じた。彼らの販売額はおそらくとても少ないだろう。ビジネスの世界では、慈善事業が利益を上げるのは難しいと思う。

そのあと私たちは大阪大学へやってきた。日本全体の総合ランクで第3位の大学であり、ハード面の設備はとても素晴らしい。理科と医学に優れた大阪大学は、世界的にもトップのレーザー実験施設を擁している。私たちは大学側の案内で彼らの実験室を見学したが、この大学は日本の科学技術研究の主要基地だと思った。続いて私たちはグループに分かれて大阪大学の留学生たちと交流した。そこでは我々は様々な国から来ているので、英語はやはり最も便利な言語であり、英語の勉強はしっかりしなければいけないと思った。

今日まで、私たち団員の振舞いは日本の人々からも称賛されているが、その中でもわが国際関係学院は最も輝いている。引き続き頑張ろう。

これからの道は、これまでになくはっきりしている。

**日 付： 5月27日（火） 3日目**

**大学名： 北京第二外国語大学**

**氏 名： 王禹童**

今日から日本での見学の旅が本格的に始まった。最初の目的地は血圧計で中国でも有名なオムロンである。この会社は「太陽の家」を母体としてオムロンが共同出資した会社である。そして工場内の多くの従業員が程度は様々だが障がい者であり、太陽の家創設者である中村氏もまさに「障がい者自立」の考えに基づき、オムロンとの共同出資会社を設立したという。私は、これは日本人の「人に迷惑をかけたくない」という特質と図らずも合致していると思う。なぜなら、日本の実力および社会保障があれば、障がい者はたとえ仕事をしなくても安心して暮らしていけるはずだが、オムロン京都太陽株式会社は障がい者に自分の価値を実現し、独立に向けた機会を提供しているのだ。「世に身心障がい者はあっても、仕事に障がいはあり得ない」は彼らの理念であり、社会に貢献し、チャレンジ精神を発揮し、人間性を尊重するために生き生きとした作業環境を実現することは、一貫して彼らの目標なのである。

日本企業と言えば、機械の自動化について触れないわけにはいかない。障がい者の仕事の便宜を図るために、企業は一貫して技術を柔軟に運用し、作業工程を改善し、機械の自動化を高め、人と機械の最適な組み合わせに到達した。たとえば部品が正確に装着されたかどうかを検査測定する際、検査プレートを上に置いてセンサーに反応させれば、表示灯を見て合っているか、間違っているかすぐ分かるようになっている。このような自動化された工程はたくさんあり、障がい者に極めて大きな利便性をもたらした。整理・整頓・清掃といった「3S」の理念、そして更に細かなことが日本企業の成熟を我々に示している。些細な部分も極限まで整備され、たとえ部品の生産工場であっても、整然とした印象を与える。

最後に私たちは大阪大学へやってきた。最も印象的だったのは、グループディスカッションで日本の大学生は自分の考え方を発表するのがあまり得意ではないようだったが、彼らは問題を真剣に考え、自分独自の見解を持っており、しかもそれは論理的であった。また最後に演壇で発表する時も、少しも怯むことなく、堂々と直接論点に切り込み、思考はとても活発だった。これに対して私たちはおそらく経験不足のためか、自分を表現する点においていささか緊張してしまったが、こうした交流を通じて、今後より良い自分を表現できると信じている。

**日 付： 5月28日（水） 4日目**

**大学名： 北京科技大学**

## 氏名：李闊

日本製品と言えば、多くの人は「豊田」の二文字を思い浮かべることだろう。今日の朝、私たちはトヨタの二番目の大工場である元町工場を見学した。

元町工場内には解説ルートと設備があり、しかも見学ルートは全て工場内の上部に設けられていて、従業員の仕事を細かく観察することができるだけでなく、彼らの邪魔をしないようになっている。私は、普段から元町工場を見学する日本の学生は決して少なくないのだろうと感じた。日本の教育は社会的な実践をととても重視しているため、大多数の日本の学生はすみやかに社会に適応できるのだと思った。

元町工場では私たちはプレス→溶接→塗装→組立→検査といった自動車生産の流れを学習した。その内、溶接箇所は約4000ヶ所余り、完成車一台の部品は3万点以上あり、非常に複雑である。従業員の作業状況を観察する際、私たちは従業員が部品の組み立てミスをするのを防ぐために、各従業員の作業エリアに3色のライトで構成された指示装置があることに気が付いた。一つの生産ラインで一種類の車だけを生産しているわけではないので、このような指示方式によって従業員の作業負担を大幅に減らすことができるのである。

その後、私たちはトヨタ会館を見学したが、館内にはクラシックな車種や最新の車種のほか、未来のクルマの模型などもあり、世界の有名自動車メーカーとしてのトヨタが、自動車業界で担っているリーダーとしての役割や自動車産業、エネルギー産業の発展への貢献などを感じ取ることができた。

トヨタ会館を離れ、私たちは静岡県農林技術研究所を訪れて、日本の農林業について考察を行った。植栽技術が発達し、しかも政府から大きな支援を得ている日本の農民たちは幸せだと私たちは感じた。静岡県農林技術研究所は様々な規格の温室を備えており、その中では様々な研究や実験が行われていた。私たちを案内してくれたのは研究所の研究員で、同時に静岡県立農林大学校の教授でもあり、私たちのたくさんの質問に答えてくれた。

夜は箱根の温泉旅館に泊まり、日本式の宴会料理が一日の疲れを吹き飛ばしてくれた。

日付：5月28日(水) 4日目

大学名：国際関係学院

氏名：楊蒨

今日はトヨタ自動車元町工場を見学した。私は文系の学生なので、自動車生産の工程や段取りについてはよくわからないが、今日の見学を通して、現場を見なければわからない知識を学ぶことができたので、大変貴重な機会となった。

トヨタ自動車の生産の理念は「好製品(よいせいひん)、好創意(よいアイデア)」である。この簡単な6文字は、言うことは簡単だが、実行するのは容易ではなく、トヨタがそれをやってのけたのは、自動車産業に長く君臨している重要な要因の一つであろう。工場の解説者の紹介によれば、生産において、一つの小さな問題によってラインが停止した場合、まずその問題を解決してから、ラインでの生産を再開するという。このやり方に私は驚かされた。最良品質の自動車を生産するために、細部の持つ力に重きを置いていることや、各段階に対する重視の程は私の想像を超えるものであった。次に、トヨタ自動車は「ジャストインタイム」と「自動化」生産方式を推進し、必要な時間内に、必要な数量の、必要な製品を生産することを強調している。「かんばん」を利用することによって、生産手順に基づいて部品を現場に運び、現場に到着した部品を生産手順に基づいて並べ替えることが実現した。彼らのこのような「品質の源は各製造工程にあり」という企業文化は、中国の粗放的な企業発展にとっては、極めて大きな学ぶべき価値を持っている。

午後、私たちは静岡県農林技術研究所を見学した。今回の見学で、私は日本の農業の科学技術のレベルの高さや民間におけるそれら技術の普及度合を、身をもって感じる事ができた。しかも、彼らは地元自治体の支援を受け、数年から数十年も研究を続けているのである。その内、芝生に関する彼らの研究は特に印象的だった。彼らは現地の小学校の運動場を一年中緑の芝生にするために、今後5～6年に及ぶ研究を始めたとのことである。私は、このような研究はまさに人々の生活に利便性をもたらし、生活の質を向上させることができるとわかった。

結果的に成功か否かは問わず、試してみなければならぬことはやってみるべきである、これは私が今日悟ったことである。農林研究所のこうしたチャレンジ精神は人生にも当てはめられることができると思う。これは人を奮い立たせる一種のプラスエネルギーである。

**日 付： 5月28日（水） 4日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 王海玲**

3日間の過程を消化していくなかで次第に日本への理解が進み、私たちの日本への理解は表面的なものから次第に深くなってきた。今日私たちはトヨタの工場と静岡県農林技術研究所を見学した。見学を通して私は、日本人は創造力と活力に満ちた民族だと感じた。日本は資源が相対的に貧しい国だが、今では強大な経済大国になっている。私は正にこうしたことが理由なのだと思う。例えば日本は国土の面積が小さいため、海を埋め立てて道を作った。また日本では駐車スペースが足りないため、立体的な駐車場を作ることを考えついた。そして日本では労働力が不足しているため、いろいろな作業をできるだけ自動化された機械、例えば自動販売機のようなものに代替させることを思いついた。今日私たちが見学した静岡県農林技術研究所も正にその通りで、日本産の野菜や果物などの農作物は日本の気候や環境、地形の影響を受け、国内の需要を満たすことができないため、ここでは研究者たちが光や温度などの詳細な研究を通じて日本における生産の現状を改善し、より豊かで品質の良い野菜や果物を国内市場に供給しようとしているのだ。

次に私の得た感想は、日本における人間本位の管理についてである。トヨタの工場では、トヨタ自動車の二つの重要な生産方式を見ることができた。第一はジャストインタイムで、必要な時に、必要な数だけ製品を生産し、生産効率を飛躍的に高め、製品の品質を保証しているのだ。第二は自動化である。人体に有害な工程は機械に任せて完成させ、同時に人はそのサポートをする。これは企業の人間本位のみならず、同時に従業員への心配りを体現し、更に効率の向上と品質の保証を可能にしている。私はトヨタが自動車産業のトップ企業の一つになれたのもその人間本位の管理と密接に関係していると思う。

今日私は日本の代表的企業の経営理念と日本企業の資源利用に対する創造性を、より深く理解することができた。

**日 付： 5月29日（木） 5日目**

**大学名： 中国石油大学**

**氏 名： 朱悦**

昨夜温泉を体験したためか、今朝はなかなか起きられず、睡眠不足を感じたが、これは温泉につかった後の睡眠の質が極めて良かったためである。幸いにも日程が十分に配慮されており、朝は芦ノ湖と古い関所めぐりのみであった。地質を学ぶ私としては、最も興味があるのは美しい風景や古跡ではなく、ガイドさんが紹介してくれた火山によって作られた湖の方だったが、結局時間の関係で見ることができなかったため、ちょっと残念だった。しかし見ることができた景色はそれを補うもので、特に海賊船で芦ノ湖を遊覧した時には、山紫水明、碧水藍天のような形容詞が次々と脳裏に浮かんだが、目の前の美しい景色はこのような形容詞では形容しきれないもので、ただ見とれるばかりであった。特に船上の爽やかな風は、更に心をオープンにしてくれた。見学した古い関所は小さな博物館のようなものだった。日本の昔の物が多くみられ、当時の文化を知ることができたが、もっとも印象的だったのは、日本の昔の刑罰で、その残酷さには驚かされた。

午後は三井物産を見学した。この日本の大手総合商社の規模はとて大きく、取り扱う業種の多さには本当に驚かされた。自分の専門分野と経営管理は特に関係はないが、このような会社を管理するのに必要な計画性やノウハウは

学ぶのに値するものである。私の見るところ、会社を管理することは自分の人生を営むことと相通じるものがあり、共に一定の計画や決まりごとそして目標を必要とし、更にはその他多くの要素を考慮しなければならない。例えば突発的事態への対処などは、両者とも現実と直面することである。

夜宿泊したホテルは東京のホテルニューオータニである。15階の部屋から東京の夜景を見ることができ、夜空の中に聳える東京タワーは凄い！と感じた。

**日 付： 5月29日（木） 5日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 杜岩**

いつの間にか日本に来て5日目になってしまったが、今日の日程はこの5日間でもっとも忙しかったことは間違いのない。私たちは箱根－芦ノ湖－静岡－東京の4カ所を駆け巡り、とても疲れた。

早朝、箱根で最後の温泉に浸かったが、昨晚は手に取るように星々が見えたのに対して、朝の箱根は山々に囲まれ湧き起こる雲が風になびいて、温泉の中で自然と一体になっている感じがした。その後の関所と芦ノ湖は、規模は小さかったが、木々に覆われた山々と水の美しさは中国国内では見られないものであった。

静岡で昼食の後、午後の長距離移動の末ついに東京の都心へたどりついた。2時間ほど早く着いたので、予定に無かった皇居を見学した。中には入れなかったが、若者たちが歩道でジョギングをしていたり、芝生に座って休んでいるのを見て、東京の人々のライフスタイルを直接的に感じる事ができた。

午後4時、三井物産を訪問したが、室内からは直接皇居を望むことができた。もし鬱蒼とした美しい木々が邪魔をしなければ、皇居を隅々まで眺めることができるだろう。このような場所に自社ビルを建てることができるのは、ある意味三井物産の実力を物語っている。中国には三井物産のような純粋に投資を行う商社はほとんどなく、その概念を説明するために、商社側は苦心したようである。商社側の紹介を通して、私たちは中日両国間の現在の貿易状況と三井物産の具体的な役割を理解することができた。三井物産は実業を持っていないため、創業以来様々な困難に直面し、巨大な投資プロジェクトが第三国の新政府によって没収された経験もあるが、一步一步地道に努力したことにより今日の会社の発展がある。

最後に私たちは三井物産のスタッフたちと懇親会で楽しく交流を行った。

**日 付： 5月29日（木） 5日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 陶浩博**

今日は午前には芦ノ湖の美しい風景をみて、午後は東京へ行き皇居を見学した後、三井物産を訪問した。芦ノ湖では、私たちは再び日本の環境保護への重視度合を感じた。多くの客が訪れる観光地であるにもかかわらず、至る所がとてもきれいに保たれ、ゴミは全くなかった。環境保護や生態系維持をしながらも、現地では高度に商業化が図られており、多くのゴルフ場が作られ、各国からの旅行者を惹きつけているのだ。

午後の皇居見学の時、天然の四角い大きな石を積み重ねた城壁を見て不思議に思った。如何なる接着剤やセメントも使用せず、ただ台形に配列されただけで建造物の安定を保っているのである。日本の歴史は中国史の長さには及ばないが、それでも十分に素晴らしく、人を引き付ける魅力を持っている。天皇制は世界的にも唯一無二のものであり、天皇が実権を掌握するか或いは虚権に留まるかは、正に時代の変遷などを象徴している。

その後の三井物産の見学によって、私は両国の貿易関係が切り離せないもので、しかもその相互依存がさらに高まっていく可能性があることを知った。投資対象を選ぶ際、三井物産は詳細な評価と貿易から投資へと転換する方式を採用している。日本社会における人情や誠実さ、正直さの重要性をそこに見出すことができる。そして中国でも人情

の積み重ねと双方の交流は大事にされている。もちろんどの国にもこのような習慣はあり、これは人情の常、社会通念ともいえる。しかし人との交流を重視している日本人は曖昧さを持ちやすく、何事も守りを以って攻めとし、退くを以って進むとするという。正に今日一緒に食事をした友人が言うように、日本企業は協調性を重視し、団体が力を合わせて協力し、成果を上げることを目指しているのだ。これに対して中国人の企業はみんなが一致して何かに取り組むことは少ないように思う。

夜の懇親会で日本側から、私たちが日本を好きになり、そして私たちが見た本当の日本を偏見なく中国に伝えてくれるよう願っているという話があった。この数日来、私の日本に対する見方は徐々に驚きから好意へと変わってきた。私は日本語専攻の学生として、将来日本へ来て仕事や勉強する日がおとずれ、中日友好の架け橋になることを心から願っている。

夜、東京の夜景は賑やかな街の明かりに色とりどりに照らされていた。24時間営業のコンビニは通りの至る所にあった。私は、日本は自然の保護と現代的な発展がともに極限まで達した国だと感嘆せざるを得なかった。

**日 付： 5月30日（金） 6日目**

**大学名： 北京科技大学**

**氏 名： 梁璟暉**

今朝、私たちは全日空の訓練センターを見学し、多くの珍しいものを体験した。例えば飛行機のコックピットではどのように離陸や着陸をするのか、そして救命衣の正しい使い方、さらにはファーストクラスの様子などである。その中で、私たちは全日空の優れたサービスと整った研修管理制度を感じる事ができた。最も重要なことは、彼らが安全を優先し、研修の70%を安全面に、30%をサービス面に充てていることで、今日まで事故はないという。

午後、私たちは多摩川清掃工場を訪れた。この工場は東京23区が出資して建設されたゴミ処理場で、焼却から排気ガス処理に至る可燃ゴミ処理装置を備えている。紹介によれば、ゴミは800℃で処理して灰にした後、更に1200℃の高温で熔融スラグにして体積を減らしているが、そういう工場は少ないという。このほか、ここでは熔融スラグを路面舗装用のブロックやアスファルトにし、プラスチックは破碎した後衣服に作り変えており、再生したゴミを再び生活の中に役立てているのである。

以前から、日本が環境保護事業を重視していることに私は感心していた。日本の国土面積は小さく資源は不足していることもあり、彼らは資源の最大利用のための研究開発に力を入れており、リサイクルは彼らの最も素晴らしい部分である。エネルギーは再生できないが、物質は循環させることができるのである。物質の再利用を通じて新しいエネルギーを生み出すことは、私たちの節約を大いに助けてくれる。このほか、日本の環境保護面での成果はゴミの分類作業がうまく行われているお蔭であり、そうでなければ後続の業務も進めることはできないのである。

私の見たところ、中国の一部の都市は同様の環境保護対策を発展させるのに十分な経済力を備えている。今始めなくて、いつまで待てというのだろうか？

**日 付： 5月30日（金） 6日目**

**大学名： 中国石油大学**

**氏 名： 張亜茹**

今日は全日空と多摩川清掃工場を見学した。全日空では顧客第一のサービスを体験するとともに、フライトシミュレーターを体験することができ大変楽しい訪問だった。多摩川清掃工場ではゴミを処理する工程を知ることができ、日本がどのようにして資源を最大限利用しているのかを実感することができた。

今回全日空で最も楽しかったのは、やはりフライトシミュレーターの体験である。機内では場面を切り替えることができ、飛行機の離陸や着陸などの操作や、過重力、無重力など一連の状況を体験することができるのだ。このほか、私

たちは避難技能訓練を行った。危険に見舞われた時は、自分を救う術を学んでおけば、生死のはざ間で生き長らえることができるかも知れない。こうした訓練をすることで、飛行機に乗る際さほど恐れることがなくなり、問題が発生しても比較的落ち着いて対応することができるだろう。

多摩川清掃工場へ向かう途中、例のゴミ清掃車を見かけると間もなく目的地に着いた。工場の外に立っても、想像していたようないやな臭いはなく、逆にここ環境は美しく、極めて清潔だった。見学を通じて、私たちは日本ではゴミの分類が細かいだけでなく、ゴミ処理の面でも極めて細かく行われていることが分かった。全ての処理が終わった後、ゴミは熔融スラグにされ、埋め立てに使われている。日本は国土面積が小さく、しかも山に囲まれ、陸地面積は更に小さいため、海の埋め立ては日本が陸地面積を拡大する主要な手段になっている。例えば大阪の関西国際空港は、ゴミを埋め立てた人工島にできた空港である。

日本の環境政策は私たちが学ぶべきものであり、現在わが国の環境問題はちょうど日本が3、40年前に直面した環境問題とよく似ている。私たちは環境にやさしい社会の実現を目指し努力したいと思う。

**日 付： 5月30日（金） 6日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 黄馨蔚**

今日午前、全日空の乗務員訓練センターを見学した。今回の訪日はスタート早々全日空の旅客機に乗って日本にやって来たため、その優れたサービスは私たちに強い印象を与えた。彼らは専門的な素養以外に、常に乗客の事を考える心を持っている。日本に来る時の機内で、離陸前とある乗務員が私たちがカメラをいじっているのを見かけると、親切にもすすんで私たちが撮影してくれたのである。これはごく小さなことだが、私はとても感動させられた。彼らの訓練過程などを見学し、そのプロセスを理解したほか、私たちは訓練施設を見学し、緊急避難訓練を受けた。これは私にとっては、一生涯役立つ体験学習といえるものである。このほか、印象深かったことはやはりフライトシミュレーターでの飛行機操縦の模擬訓練で、大変楽しかった。このように身近に模擬訓練を体験する機会は本当に得難いものである。今回の訪日活動と全日空が私にこのような忘れがたい体験をさせてくれたことに非常に感激している。

午後私たちは多摩川清掃工場を見学した。到着するやその清潔な環境には驚かされた。私たちは会社の概況を聞いた後見学を行った。最も印象的だったのは、ここでは効率よく環境に配慮してゴミを処理すると同時に、資源の再利用も実現していることである。例えば、一日の焼却量300トンの焼却炉2基は、ゴミを燃やして生じる6400キロワットの熱量を発電に用いると同時に、付近住民の温水用に供給しているのである。このほか風力発電も行っている。発電した電力は自身の需要を賄うほか、電力会社にも販売している。更に、一部の廃棄素材は集めて再利用し、ビンやスタッフの作業服、再生紙などを作り、多方面で社会に貢献している。

このほかに気が付いたことは、彼らが屋上のスペースを活用して草花を植えていたことで、まるで多摩川と一体化した空中庭園のような趣を感じた。

**日 付： 5月31日（土） 7日目**

**大学名： 北京科技大学**

**氏 名： 黄新**

午前9時30分、会議室で団員たちが一人ずつホームステイ先の家庭に引き取られていくと、残されている人はだんだん少なくなっていく、まるで一種の「孤児」のような感覚におそわれた。結局、4歳の坊やがお父さんと一緒に現れ、ついにホームステイが始まった！

彼らは利便性を考えて地下鉄は使わず、車で1時間かけて私を迎えに来たのだ。車内の狭い空間で、もし話ができなかったら、雰囲気はかなり気まずくなるが、うれしいことに大武さんはとても明るい人だった。車内で、彼が日本語、

英語、中国語、韓国語、スペイン語、フランス語ができる言語通であり、また中国通であることがわかった。私が急に充電器を買いたいと言った時も、彼は熱心に数軒の店を探してくれて、ようやく買うことができた。彼の奥さんはちょうど出産のために入院していたので、お会いすることはできなかったが、彼らの4歳の子供はとても可愛かった。日本の子供は一種の「萌え」を感じさせる。

昼食は、大武さんが一緒に中国語を学んでいる仲間を誘い、彼らが家で作った料理を持ってきた。私は、これは日本人が他所の家に集まる時の伝統に違いないと思った。食事中的会話の雰囲気は大変よく、たこ焼きの好きな私は彼らに作り方を習い、その場でたこ焼きを作って皆に食べてもらったので、昼食作りに多少の貢献はできたと思う。夕方、公園で大武さんの仲間と別れた後、サッカー好きの彼ら親子と一緒に汗まみれになるまでボールで遊び、更に仲良くなった。そして日本人の習慣にあわせて風呂に浸かり、この一日を終えることになり、庶民的な銭湯と日本式の回転寿司を体験した後、私たちは満足して帰宅した。子供を寝かせつけた後、私たち二人の「おじさん」は一緒にビールを飲み、テレビを見て、語り合ったが、いつの間にか1時を回ってしまった。私たちはサッカーに始まり、専門分野や大学、未来、中日の比較、経済、家庭、ゲームそして天文地理まで、眠気と酔いに負けて寝付くまで、あらゆる話題について語り合った。

日揮は日本最大のエネルギー企業で、私の専門と一致する。日本の会社の大多数は終身雇用制で、会社は従業員の育成に大いに力を入れていて、従業員に対し大量の資金やエネルギーを投入しているため、従業員の業務能力が向上し会社の利益も増えるだけでなく、従業員の忠誠心も高まり、会社のために生涯頑張ろうとするのである。

**日 付： 5月31日（土） 7日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 徐哲宇**

今日は、訪日して以来、出国して以来、初めて涙を流した。

プレゼントを用意して、緊張したまま出発し、ホームステイ先のご主人である城和啓さんに会った。ご主人は中国語がよくできて、奥さんもかつて中国に留学したことがあるので、コミュニケーションは問題なかった。

浅草寺へ行きお参りをした後、東京で一番おいしいという天ぷら料理店へ連れて行ってくれた。スケジュールは言葉で言い表せないほど周到で、午後は完全に私に付き添ってくれたので、大きな収穫が得られた。

道すがら、お二人とは大いに意気投合し、いにしえから現在まで、スポーツから音楽まで、航空券から一般市民の心の中の政治まで、次から次へとたくさん話題について語り合った。その晩私たちは小さな小料理屋に入った。席に着いた後、奥さんの涼子さんはなぜかすぐに席を外されたが、すぐにご主人と酒を飲み食事をした。やがて奥さんが店に戻り、楽しい雰囲気の中で食事が終わるものだと思っていた。

ところがもうすぐ食事が終わろうとするとき、涼子さんはバースデーケーキを取り出した。その上には「21歳の誕生日おめでとう 徐哲宇先生」と書かれていたのだ。その後、店内の皆でバースデーソングを歌ってくれて、その感動と喜びのあまり私は涙してしまった。と言うのも、長い間誕生日を祝ったことがなかったからである。日本人の細やかさと心配り、私への関心や共感、今回の旅行で実感した最大の収穫である。

私は日本人々とこの土地が好きだ。

**日 付： 5月31日（土） 7日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 楊曉宇**

今日から待ちに待ったホームステイが始まった。朝9時半、私のホストファミリーとは時間通りに対面した。ホストファミリーにはお父さんとお母さん、そして娘さんがいた。お父さんとお母さんは共に50代で、私に対してとても友好的でい

つも笑顔を見せていた。彼らはかつて中国で仕事をしたことがあったので、ずっと中国語で私とコミュニケーションをとろうとしてくれた。娘さんは大学の2年生で、年齢も学年も同じだったので私とは特に話が合った。昼間は原宿の表参道へ出かけた。ここは日本の若者たちがよく行くところで、たくさんの流行の服やアクセサリーなどがあるが、ここではダイソーという良い店を見つけた。中にある商品は全て100円である。

夜、私たちは家でご主人の作ったイタリア料理を食べた。彼ら一家は上海やアメリカなどで一時期過ごされていたので、生活様式は非常に西洋的だった。彼らの夕食は日本料理、アメリカ料理、イタリア料理、中国料理など様々だという。食後、日本のテレビドラマや中国との交流について語り合った。私は自分の父母が若いとき日本映画の『君よ憤怒の河を渉れ』(中国名:追捕)が大変好きだったことや、私は今テレビドラマの『リーガルハイ』が好きだと彼らに言ったところ、大変喜んでくれた。

明日も彼らと一日一緒に過ごせるので、期待感でいっぱいである。

**日 付： 5月31日 (土) 7日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 熊夢玥**

ついにホストファミリーと対面する日がやってきた。これまで緊張と感激の中でこの日が来るのを待っていたのだ。出発する1ヶ月前から、ホストファミリーの綾香お姉さんはEメールで私と連絡を取りあい、この2日間の遊覧計画を立ててくれていたのである。

私を受け入れてくれた家庭は、伊藤忠商事の佐藤綾香さんとそのご両親である。綾香さんはとてもきれいで優しいお姉さんだった。私たちが参観している時にも、綾香さんは携帯電話を外国人に貸してあげたり、道に迷った人を案内してあげたりした。以前テレビで、日本人は世界で最も見知らぬ人を親切に助ける国民であると紹介されていたが、ここでも日本人の親切心を深く感じる事ができた。

今日の日が来るまで、私はこれまでにない緊張と期待の中でこの日が来るのを待っていた。しかし綾香さんと一緒に帰宅し、おじさんとおばさんにお会いして、私はやっとその心配が杞憂だったことに気付いた。彼らはとても親切で話し好きな人だったので、彼らとの会話はとても楽しかった。今日は綾香さんの案内で新宿や渋谷で遊び、夜はご家族の皆さんと夕食を共にし、忘れられない一日を過ごすことができた。

**日 付： 6月1日 (日) 8日目**

**大学名： 中国石油大学**

**氏 名： 丁柏昕**

暁の上で目覚めたときはすでに朝の7時だった。すでに奥さんが朝食の準備をしているのが聞こえたので、急いで部屋を片付けて、「モーニング」の一言からこの日一日の交流が始まった。私とご主人は早めに朝食をすませ、彼は私を連れて自転車で彼らの住んでいる千葉を案内してくれた。そして私の色々な質問にも、とても詳しく説明してくれた。

例えば、日本の国民的スポーツとも言われる野球や日本人の幸福感、日本の学生の海外留学に対する願望、一般の日本人の週末のレジャー、日本の不動産価格などなど、日本の基本的ライフスタイルに対する私の理解をより深めてくれたが、その範囲もまたとても幅広いものだった。

スーパーマーケットを見て回り中日のスーパーの違いを体験してから、私たちは帰宅し暫しの休憩の後、再度の東京ツアーを開始した。私たちは30度以上の暑さの中、ファッション中心の若者の街である原宿を訪れた。河尻夫妻は私のために丁寧にスケジュールを決めてくれて、私をより日本の特色のある場所へ連れて行ってくれた。昼は日本式のそばを食べたが、とても美味しかった。午後は付近の明治神宮を見学したが、幸運にも日本式の婚礼の様子を見ることができた。その後公園を散歩したが、たくさんの若者たちが公園で音楽を演奏したり、野外料理をしたり、ゲームな

どをしているのを見て、自分も本来こういった有意義な週末の時間を過ごさなければいけないのだと感じた。

**日付：6月1日（日）8日目**

**大学名：北京語言大学**

**氏名：劉華南**

今日は平沢哲さんの家での2日目である。さほちゃんは私より少し早く起きた。朝は奥さんが準備した朝食を食べたが、これは昨日一緒に行ったスーパーで買ったパンとウインナーソーセージである。その後、さほちゃんに付き添って彼女の好きなゲームで遊び、日本の伝統的な碁の一種である将棋をさし、さほちゃんにお話を聞かせ、さらに彼女を連れて外の広場へ行ってブランコで遊んだ。

午後はお台場へ行き、九州で最も人気のあるラーメンを食べたが、来日以来一番おいしい食べ物だと感じた。お台場の風景は美しく、海、レインボーブリッジ、女神像、さらに傍には自分の家族のようなさほちゃん一家、日本に来てから最も安らぐ時間だった。

さほちゃん一家は私に手紙を書いてくれた。それぞれ1ページ分あり、受け取った時には日本人の真面目さや細やかさ、そして彼らの親切さを真に感じる事ができた。

別れの時は当然名残惜しいが、仕方のないことである。さほちゃんと私はとても仲良くなり、まるで兄妹のように感じた。さほちゃんはまだ5歳なので、自分で中国に行くことはできないが、大きくなってから中国へ遊びに来てほしいと思っている。そしてこの異国での友情が途切れないことを願っている。

夜は秋葉原へ行き、日本独特の電気製品の販売文化を見ることができた。100軒以上の電気店が一つの通りに面して建ち、一々見る事ができないほどであった。またメイドや道端で声をかけて物を売る女の子も見かけた。

明日からはまた正式な企業訪問だが、全てが順調に行き、沢山の収穫があることを願っている。

**日付：6月1日（日）8日目**

**大学名：国際関係学院**

**氏名：呉珂**

今日はホームステイの2日目で、朝はお母さんが心を込めて作った日本式の朝食を堪能した。私は比較的濃い味が好きなため、お母さんは、名古屋風の東京と比べて少し濃い味付けの味噌汁を作ってくれた。また私は、日本人は本当に小動物が好きで、ほとんどの家でペットを飼っていることに気が付いた。しかもとても仲が良く、食事の時、ホストファミリーの猫たちが食卓に飛び乗ってもご主人は決して叱ったりせず、心から大切にしている。

朝食後、自転車でブックオフへ本を買いに行った。日本で自転車に乗れたのは本当に得難いことで、自分が普段その街に住んでいるかのような感覚だった。日本の自転車道はとても狭いのは当初から気が付いていた。おそらく土地が狭いので、道路も狭いのだろう。そして皆が交通規則を守っていた。しかも道路が狭いので皆縦に列を作り、決して並列して道を塞ぐことはなかった。それからブックオフで驚いたのは、日本では本の値段が高いので、多くの人がブックオフへ中古本を買いに行くのだが、店に入ると店内の本は古本の感じは一切なく、とても新しくあったことである。私は日本人は物をとても大切に扱っていると感じた。日本にはリサイクルショップは至る所にあり、皆リサイクル品であることをそれほど気にせず使っていることにとっても感心させられた。もし中国国内でもこれらの物をリサイクル利用できれば、大いに浪費を減らせることだろう。

午後はお母さんと新宿の伊勢丹と新宿御苑へ行った。最も賑やかな場所に新宿御苑のようなものがあることにはとても驚かされた。なぜならそれは小さな公園ではなく、まるで森が東京の繁華街の一角を占めているようで、想像もつかなかったからである。中には巨大な樹木や、広大な芝生、小さな池まであり、しかも周辺の高層建築物はみな木々に遮られ、まるで森林の中に入り込んだように感じる。都市の中にこのような都市の喧騒から遠く隔絶された場所があることは、本当にすごいことだと思った。

**日 付： 6月1日（日） 8日目**

**大学名： 北京第二外国語大学**

**氏 名： 楊雨辰**

今日、私たちは明治神宮に来た。私の運気は今日もよく、参拝の後、ちょうど4組の新婚さんによる日本の伝統的な神前結婚式を目にすることができた。

明治神宮の後、スカイツリーに行ったが、人があまりにも多く、案内スタッフの話では大体1時間並ぶ必要があるということで、思い切って諦めた。

楽しい時間が過ぎ去るのはいつも早いもので、あっと言う間に午後4時だったので、私と小林さん一家はお別れすることになり、プレゼントを交換して友情を確かめあった。

今回のホームステイで最も印象的だったことは、日本人の親切さやもてなし好き、そして責任感である。小林さんは現在三井物産に勤めているが、毎日とても忙しいという。それでも小林さんは私を色々な所に案内してくれ、また私に付き添い秋葉原を歩き回り、帰宅すると服を着替える間もなく、疲れのため眠ってしまうほどであった。私はこれにとっても感動した。

今回のホームステイを通じて、私は日本および日本人に対する理解を更に深めるとともに、日本人の心からのおもてなしに心を打たれた。考えてみれば、今回のホームステイは偶然結ばれた縁ではあるが、私たちはこの縁を大事にして、日本の人や物事を正確に認識するべきだと思う。帰国後も自分のこの2日間のホームステイで見聞きしたことを周囲の人に伝え、できるだけ周りの友人たちの日本への認識不足を解消し、中日民間交流のための道づくりをしたいと思う。

**日 付： 6月2日（月） 9日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 董耀聰**

今日私たちは三井住友銀行と早稲田大学を見学した。三井住友銀行では中国国内の各銀行とは異なる情景を目にした。客と銀行員のコミュニケーションはガラス越しに行う必要がなく、人と人との信頼関係を示していた。三井住友銀行本店はとても大きく、それぞれ別の機能を持っている3つのビルに分かれていることに驚かされた。また三井住友銀行では昼食のもてなしも受けた。

午後は早稲田大学を訪れ、ある先生と激しい討論を行った。しかし最終的に私たちは、皆自分の先入観をもって他人を見たり、同様に先入観をもって日本を見ているため、人は常に何らかの偏見や不満を抱えていることに気が付いた。そのため私たちのすべきことは、できるだけ客観的な態度で物事や日本のあらゆる面を見ることである。私たちは日本でわずか12日間しか滞在できないので、分からない部分があるのは必然的である。したがって、私たちは自分の視点から理解し、考えることで、共通点を求め相違点を残すようにしなければならない。

早稲田大学では、一部の日本の大学生と交流することができた。幸いなことに、これらの学生はみな本科生だったので、私たちは大学生活や将来の生活への展望などを自由に話すことができた。多くの大学生は皆直接就職することを望んでいて、しかも待遇は好条件だという事がわかった。それに対して中国では状況が全く異なるため、今回両国の就職面の格差や違いを知ることができた。しかし、中国は限られた時間の中で日本に追いつき、また中国独自のやり方で問題を解決できると思っている。今回の訪問では収穫が極めて多く、多くの団員は日本人と友だちになった。私たちは自らの力でごくわずかではあるが中日友好に貢献できたと思う。

**日 付： 6月2日（月） 9日目**

**大学名： 中国石油大学**

**氏名：張亜茹**

午前は三井住友銀行を訪問、午後は早稲田大学での見学と交流。充実した一日が日本の友人との惜別の中で終わりを迎え、日本での活動も次第に閉幕が近づき、日本における滞在も残すところわずか3日となった。

他の企業と同様、三井住友銀行にも中国語を話せる多くの高級管理職の人がいた。彼らは中国が好きで、ある部長は「中国へ行くのではなく、中国へ帰る」と語った。中国は彼らにとってさまざまな意味を持っている。それは単に勤務地ということではなく、彼らは中国で10数年間仕事をしているため、すでに完全に中国に溶け込んでいる。三井住友銀行で私たちが驚いたのは窓口が開放式だったことで、中国のように行員と客が厚い大きなガラス板で隔離されているのとは違っていた。日本の銀行は基本的にどこも開放式であり、この点は先進国であり、また調和のある社会の最も有力な証拠である。

午後の早稲田大学への訪問でも多くの事を感じた。私たちと日本の学生は将来のキャリア計画について討論と交流を行ったが、日本と中国は状況が大きく異なっていた。日本の学生は一般的に本科を卒業すると仕事につくが、中国では就職難のため、多くの人により満足できる収入を得るために、進学を選んでいる。また日本では就業時に専攻分野による制限がなく、多くの場合職場と学んだ分野とはさほど関係がないが、中国では一般的に専攻分野と関係のある仕事を選ぶ。しかし時として従事する仕事と専攻分野が関係がない場合もある。

今日は端午節なので、ふるさとの家族を思い起こしていた。これぞまさに中国人の言うところの「佳節に逢う毎に、ますます親を思う」である。

**日付：6月2日（月）9日目**

**大学名：北京第二外国語大学**

**氏名：席涵沛**

また新しい1日がやってきたが、それは同様に帰国の日へ1日近づいたことになる。確か自分が最後に日記を書いたのは中一の時だった。子供のころは、毎日母に日記を書かされた。初めは上手く書けず、母に言わせればただらと書いていたようだったが、その後母の教えによって、日記も知らないうちにキチンと書けるようになった。7年の時を経た今回の旅行を契機に、私は今回の旅行で起こったことを少しずつ記録してきた。もし将来読み返してみることがあれば、きっと懐かしさで胸がいっぱいになることだろう。

三井住友銀行では、銀行の人間本位のサービスについて見学したが、予想だにしていなかった銀行の金庫まで見学することができた。見学後には三井住友銀行で昼食も頂いたが、思いがけないことに、その場で司会と通訳をしてくれた男性職員はなんと私と同じ大学の先輩にあたるということが、三井住友銀行のある職員から聞かされたのだ。これにはとても誇らしく思い、私は自分をしっかり向上させようと密かに決意した。

そして私たちは世界的に有名な高等教育機関である早稲田大学を見学した。この大学は独立と自由の精神で名高く、大学の中にある歴史を感じさせる建築物や学術的な雰囲気は大いに惹きつけられたが、日本の学生たちとの交流でも多くの収穫を得ることができた。私はもし可能であれば、早稲田大学で自分の好きな経済や経営を学び、中日友好のために貢献したいと思った。

**日付：6月3日（火）10日目**

**大学名：北京科技大学**

**氏名：李闊**

活動日程も終わりに近づき、日本の各方面について様々な理解が得られたが、私たちの日本に対する見方や今回の訪日の感想を、これまで中日友好協力に努力されている外交官らに伝えるために、今朝、私たちは中国駐日大使館を表敬訪問した。

私たちと交流したのは律参事官で、最初に各大学の代表が発言したあと、質疑応答という段取りであった。質疑応答の中で、ある学生がいくつかの敏感な問題について質問した。その場には日中経済協会の関氏が在席していたため、一方的な展開にならないように、律参事官は先に関氏に発言してもらい、そのあと参事官は中国側の見解を述べた。こうした難しい問題について、今回お二人の発言を通して中日双方の態度を理解することができ、私たちにとってとりわけ重要な機会であった。そのあと私は参事官に、私たちは日本で12日間しか滞在できないこともあり、見ることのできた事物は表面的かもしれないので、日本にはまだどのような問題があるのかたずねた。律参事官は、日本は先進国であり、先進国に普遍的に存在する問題を抱えており、その問題の解決は時間がかかると思われる。しかしながら、日本はそれでも多くの分野で努力し、良い成果を上げていると述べた。

最後に律参事官は、彼の見た日本や中国と日本が協力すべき点などについて30分も話をされた。私たちはそこから外交官の魅力、そして中日関係についてより多くを知り、とても大きな収穫があった。

午後、私たちはJX日鉱日石エネルギー株式会社根岸製油所を見学した。私たちは石油関係が専門ではなく、石油製錬、抽出などの知識についてはさほど分からなかったが、見学ではこの清潔さや秩序性、そして規模の大きさを感じることができた。同社は今回わざわざ二人の北京支社の職員を呼び、私たちに同社の紹介をしてくれた。その心配りに私たちはとても感動した。

**日 付： 6月3日 (火) 10日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 劉夢瑤**

訪日もすでに10日間の日程をこなした。いつの間にかあと2日で帰国である。この10日間の訪日体験は皆に強い印象を与えた。

早朝ホテルを出発し、中国駐日大使館を表敬訪問した。程永華大使は多忙の中、団員たちを接見し記念撮影をしてくれた。バスが中国駐日大使館に着いたとき、車上の団長や先生方はうれしそうに「ついにわが家にたどりついたぞ」とみんなに話しかけたので、みんな感激がこみ上げてきた。大使と記念撮影をした後、六つの大学の代表がそれぞれ訪日での印象や感想を報告した。その後、皆で中日関係や日本社会の調和性、日本社会にはどのような問題が存在するのかなどについて参事官の見解を拝聴したが、皆それぞれ印象深かったようだ。

昼は居酒屋で食事を楽しんだ後、JX日鉱日石エネルギー株式会社根岸製油所を見学した。これまでは製油所の環境というものはかなり悪く、汚染も相当ひどいと思っていた。しかし到着してみると、根岸製油所の環境はとてもよく、緑化対策も十分にされていた。このほか、作業そのものは厳しいものだが、たとえばロゴのデザインなどの工夫で、スタッフたちにリラックスした作業環境を提供していたのは、日本企業の大きな特徴だと思った。バスの中では団員の石油大学の学生に精油に関する問題や製油所に対する見方について教えてもらい、皆大いに参考になった。

**日 付： 6月3日 (火) 10日目**

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 陶浩博**

今日、私たちはうれしいことに中国駐日大使館を表敬訪問し、尊敬する大使にお会いすることができたが、公務多忙のため、私たちとの交流活動には参加されなかった。そのため律参事官が私たちとの会議に出席された。まず、私たちはこれまで10日間の感想などをそれぞれ報告した。そのあと律参事官が私たちの質問に対し見解を述べられた。その中で律参事官は、中日両国は戦争してはならない隣国であり、大部分の日本人は平和を愛し、中日交流を望んでいるが、過激で悪意を持った日本の右翼がいまだ存在していると述べられた。私は、正にこうした右翼が第二次世界大戦を否定し、中国脅威論を公然と振り撒いていることで、中日関係が硬直した局面に陥っているのだと思う。

また同時に、間違った認識、デマ、無理解が日本の人々にわが国に対する悪印象を抱かせているのだと思う。そして障壁をなくす最大の武器は自ら体験し、自ら観察することである。したがって、両国の相互交流を強化し、相互理解を図ることこそが問題解決のカギである。次に律参事官は、彼が数十年前に日本に来た時、日本の現代的社会の清潔さや便利さを感じたが、私たちが今回日本に来た時にも、やはり同様の感想を持ったことについて、実に悲しいと述べられた。中国はわずか数十年という短期間に大きな変化があったが、それでもまだ日本には追いついていないのだ。私は残念に思うと同時に、律参事官のお話のとおり、将来日本を訪れた中国の学生が如何なる驚きも感じないようになってほしいと願っている。

午後は、根岸製油所を見学した。彼らの技術そのものはよくわからないが、製油所と周囲の環境の融合性には驚かされた。製油所は汚染度が高い企業だが、それでも従業員たちは彼らなりの社会貢献をしていた。私はこれこそ彼らの社会的責任感の現れだと思った。他所の先端技術を学ぶことは、ある意味表面を学ぶことに過ぎず、物事を曖昧にせず究める態度や社会に対する責任感といったものを学ぶことこそが、最も大事なことだと感じた。

**日 付： 6月4日（水） 11日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 趙栖沢**

今日の午前、東芝未来科学館を見学した。これまでの日程は自分の専門とは関係なかったが、今日はコンピューターのハードウェア関連の内容を多く見る事ができた。東芝はここでRAMとMEMの2つの特性を結び付けたハードディスクを展示しており、コンピューターのデータ保存面でこれまで解決できなかった問題を解決したものである。しかし東芝に対して私が感じていた疑問は、東芝がどのようにして発明と利益のバランスをとっているのかということである。なぜなら新技術発明のサイクルは比較的長いから、東芝は何を頼りに発明をサポートしているのだろうか。時間に限りがあり、質問できなかったが、いずれ回答が得られるよう願っている。

昼は松本楼で食事をした。小坂文乃さんは梅屋庄吉のひ孫にあたり、現在でも中日友好のために尽力されている。梁さんはバスの中で一つの問題を出した。それは第4代目にあたる彼女が中日友好に奮闘しているのは、どのような力によって支えられているのかということである。私は自分なりの回答を考えてみた。それは一種の2国間関係に対する正しい見方であり、最も重要な点である。中日関係に対しては冷静な認識が必要で、平和は永遠の基本概念である。これは小坂さんの最も基本的な判断であると信じている。第二は家族の夢に対するこだわりである。梅屋先生と孫中山先生の故事は私たちを感動させただけでなく、同様に小坂さんをも感動させ、梅屋先生の遺志を引き継ぐことを願ったのだろう。最後に最も重要な点は、平和に対する願いである。誰も戦争は望んでいないのである。以上は個人的見解である。

午後、ディズニーランドへ行った。童話の世界である。ディズニーランドでいくつかの問題について考えた。①なぜ皆行儀よく並んでいるのか、通路は2人並べるのに、なぜ誰も割り込まず、押し合ったりしないのか？ ②今日は水曜日なのに、ディズニーランドはなぜこんなに人が多いのか？ ③なぜどのアトラクションも長い行列ができていても関わらず、比較的早く遊べるのか？ ④環境がよく、ゴミが落ちていない、そしてスタッフもとても優しい。①と④は答えるまでもない。②は答えが分からない。③はアトラクションが多く、魔法のじゅうたんにより人とアトラクションの移動スピードを同じくする事で、アトラクションを止めることなく次の乗客が乗ることができるため、回転が速い。

**日 付： 6月4日（水） 11日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 杜岩**

いつの間にか日程のほとんどを終え、あと二日で我々の訪問の旅もつつがなく終了である。そう考えると、今日の訪

間日程が一層大事に思えてきて、全ての触角をいっばいに広げてより多くの経験を吸収し、日本での最後の日々を心に刻みたいと思った。

午前、東芝未来科学館を訪問し、東芝の歴史と現在そして未来を見学した。東芝の名前は中国でもよく知られている。おそらく最近は十数年前ほどの勢いが無いせいも、私の印象の中では東芝が苦境に陥っているというような主観的な印象があった。しかし未来科学館の見学後は、東芝がここ数年決して停滞していたのではないと分かった。日本の工業と同様、マーケティング面などで多少の問題があったのかも知れないが、科学技術の発展に関しては、全く停滞していなかったのだ。例えば、私が個人的に興味を持っている超伝導リニアのデモンストレーションについていえば、この技術が何年後に普及するのかわからないが、東芝が研究開発を推進している技術は自社の営利目的以外に、人類社会の発展を積極的に促進するものだと確信している。

昼は日比谷公園の松本楼で昼食をとった。ここは当時、梅屋庄吉先生と孫中山先生の友情と革命運動の舞台となった場所で、多くの重要な会議がここで開催されている。ここはまた中国辛亥革命の海外拠点でもあり、後に江沢民、胡錦濤、温家宝ら中国の指導者もここを訪れ、しかも私たちと同じ部屋で食事をしたということで、非常に光栄に感じた。

午後の日程は比較的楽で、皆が一番期待していたディズニーランドへ行った。ここは老若男女だれもが楽しめるテーマパークである。東京ディズニーにはさらに「ディズニーシー」もあるが、私たちは今回ディズニーランドでの活動である。ディズニーランドは大きくはなかったが、楽しさいっぱいで、閉園前の花火と千葉の海風は忘れられない思い出になった。

**日 付： 6月4日（水） 11日目**

**大学名： 北京第二外国語大学**

**氏 名： 鄭子茂**

かつて国家指導者の鄧小平氏は「科学技術は第一の生産力である」と述べたことがある。科学技術のイノベーションを保障してこそ絶えず効率を高めることができる。今日、私たちは東芝未来科学館を訪れ、科学技術が日本の発展過程の中でどのような役割を演じてきたのかを知ることができた。

明治維新以降、日本は次第に開国し、西側の進んだ生産性と科学的思考、技術を学習し改良した。著名な発明家の田中久重氏と藤岡市助氏は、先進的な技術を通して世界をより便利に変えるという理念に従って、万年自鳴鐘や電球灯を相次いで発明した。そして彼らのこの精神は代々伝えられ、さらに彼らの後継者が二相交流発電機という世界に先駆ける製品を発明した。現代社会は人口増加、エネルギー不足、環境破壊など多くの問題に直面しているが、科学はもう人々の生活に利便性を提供するだけの手段ではなく、新しい時代は科学技術に新たな意味、即ち私たちの未来を豊かにするという目標を与えたのである。私たちは科学技術意識の育成と科学技術人材の育成を重視し、科学技術を国のソフトパワーにおける最も重要な部分と理解しなければならない。そうしてこそ、先進国との格差を縮小させることができ、単に経済的なデータだけではなく総合的国力において世界的大国に発展することができるのである。

昼は日比谷公園にある松本楼へ行き、小坂文乃さんから当時の孫中山先生が中国革命に果たした貢献および彼と梅屋庄吉先生の友情についてのお話を伺った。「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」という約束に基づき、梅屋庄吉先生は全財産を孫中山先生の革命事業につぎ込んだ。彼らの何の利益のためでもなく、ただ志を同じくして生まれた生死の交わりの話には深く感動した。私たちは中国の未来の開拓者として、このような精神を備え、如何なる利益のためでもなく、ただ中日両国の友好のために自分の全てを捧げ、自分の学んだことを基に両国の優れた文化を伝え、両国の民間交流を積極的に促進し、そして次世代の青年たちの平和に対する初心をしっかりと育てていかなければならない。

**日 付： 6月5日（木） 12日目**

**大学名： 北京科技大学**

**氏 名： 李慧**

瞬間に帰国の日がやってきた。午前中2時間ホテルニューオータニを見学して、私たちはホテルの電力システムが自給自足であることや、生ゴミを処理して肥料に変えた後、付近の6箇所の農園に供給し新鮮な野菜を育てた後、再びホテルに供給するといったシステムでホテルのエネルギーと資源利用の最大化を図っていることを知った。

見学の後、同じホテルニューオータニで盛大な歓送会が行われた。日中経済協会の代表者、そしてトヨタ、三井物産、三井住友銀行、全日空、東芝など私たちが訪問した企業の代表者が見送りに足を運ばれた。そしてまたホストファミリーの方々も大勢見送りに駆けつけてくれた。見慣れた皆さんの顔を見ると、私たちが訪問した時の様々な場面が思い起こされ、正に感無量だった。

特に感動させられたのは、東芝未来科学館と私のホストファミリーである。東芝の代表者は入場するとすぐに私を見つけ出し、書類を差し出した。それは訪問した日に私が出した質問に対する回答があまり具体的でなく不十分だったので、回答を補足したものだった。その時私は何気なく質問を口にしたのだが、東芝のスタッフがこのように気にかけてくれた事に本当に感動させられた。そして私のホストファミリーだが、彼らからは私たちの写真の入ったUSBをいただいた他、お菓子と中国語で書いた手紙もいただき、その手紙を読みだすと涙があふれた。私たちは抱き合って別れの挨拶をし、互いに感謝を表し、そして次回の互いの招待とともに慰め合ったが、私の涙は止まらなかった。日本での数日間、日本の友人たちにはとても感動させられた。彼らの親切さや友好的態度など、全てが皆を感動させ、感謝させ、そして互いの理解を深め、私たちの友情を深めたのである。遠くない将来、中日両国はより親密さを増し、互いの行き来はより密接になると信じている。

さようなら、日本。

**日 付： 6月5日（木） 12日目**

**大学名： 北京交通大学**

**氏 名： 陸沢臻**

今日のキーワードは感動的な名残惜しさである。昼の歓送会で、私たちはホストファミリーとの再会を果たした。一緒にいた時間は短かったが、お互いに対する情を直接的に感じる事ができた。

『時の流れに身を任せ』を歌った後は、多くの団員たちが涙していた。その涙には親愛なる日本の友人たちとの別れを惜しむ気持ちがにじみ、各学校の代表の発言にも、今回の旅行中私たちのお世話をしてくれた日本の皆さんへの感謝の気持ちが表わされていた。

空港へ向かうバスの中で、私を含む多くの団員たちがそれぞれの感想を発表したが、皆感謝と別れを惜しむものばかりだった。私たちは随行の先生方の細やかな心配りと指導に感謝するとともに、団員たちが互いに理解し助け合い、旅行中、笑いあり涙ありだったことにも感謝した。

12日間の日本訪問は今日ピリオドを打つが、この12日間に生まれた友情は永遠に残ると私は信じている。

**日 付： 6月5日（木） 12日目**

**大学名： 北京語言大学**

**氏 名： 買居旦・尼加提**

今でも頭の中では鄧麗君(テレサ・テン)の「時の流れに身をまかせ、あなたの色に染められ・・・」という歌詞が繰り返されている。最も思いがけなかったのは皆がバスで楽しく唄ったこの歌に、今日は送別会の舞台であるように涙を

誘われたことである。

私は今、ホストファミリーの貴子さんが撮ってくれた、私の初めての檜舞台での母校の同級生との日本語による発表の映像を見ている。

今日は朝から荷物整理を行ったあと、宿泊したホテルの環境対策を見学し、今回の訪問最後の学習が無事終了した。私たちが宿泊したホテルニューオータニは日本で3本の指に入るホテルで、50年の歴史がある。かつて中日国交正常化の時期には、中国駐日臨時大使館がホテルニューオータニ内に開設されたという。私たちを案内してくれたスタッフの中にも勤続49年の方がおられた。まさにホテルニューオータニの成長の生き証人ということができる。

私たちはホテルの廃水処理場、ゴミの分類処理場、発電施設などを見学した。ホテル地下の作業場で、私たちは普段は気にも留めない部屋のスイッチや廊下の照明灯のコントロールの仕組みをこの目で見て、巨大なホテル内のあらゆるエネルギーの供給と循環の原理を理解することができた。複雑なパイプラインや電気ケーブルの配線は、システムの発達したホテルが顧客に対してなぜ一貫して最上のサービスを提供できるのかを物語っていた。

慌ただしい作業場でも、あらゆる修理道具、たとえば、ペンチ、ハサミなどが全て厳格な配置方法で指定された位置に置かれている。道具類の下にはスタッフの靴や衣服が置かれ、靴は皆揃えられ、同じ方向に向けて置かれていた。これもまた日本人の仕事へのひたむきさが現れた小さな一例だと思う。

**日 付： 6月5日（木） 12日目**

**大学名： 北京第二外国語大学**

**氏 名： 許舒園**

訪日の最終日は、企業や観光地へは行かず、1週間宿泊したホテルニューオータニのゴミ処理施設を見学した。

豪華な五つ星ホテルであるこのホテルでは、毎日水や電気の消費以外に、大量のゴミが発生する。そのためここでは、地下に小型の汚水処理場を建設すると同時に、ゴミ処理時に焼却して出る熱で発電も行っている。このようにして、ホテルは必要な電力の50～70%を自ら賄っている。今回の旅行で、長期にわたって安定して発展している会社はどこも、目の前の小さな利益にとらわれず、必ず目を未来に向け、長期的な持続可能な発展計画を打ち出していることが分かった。

そして最後に、ホテルで歓送会が行われ、各方面の代表者が参加された。この12日間にお会いした方々を見かけると、喜びとともに感慨もひとしおだった。楽しい時間は早くたつという。この12日間に色々なことが起こり、楽しいことも不愉快なこともあったが、この12日間に自分の多くの希望が叶えられたので、全く後悔はなかった。ただ一つ残念だったことは、この日私のホストファミリーの坂本さん夫婦にお会いできなかったことだが、帰国後も連絡を取っていきいたいと思う。

今回の『走近日企・感受日本』の訪日活動は無事終了した。個人的に言えば、これは楽しく充実した活動だった。団体の立場から言えば、今回の訪問は私たちに真実の日本を見せてくれただけでなく、私たちはこの隣国をより好きになったと信じている。私たちを受け入れてくださった日本の方々も同様の感想を持たれるよう願っている。最後に近い将来、この美しく優しさに溢れた国を再び訪問したいと思う。